

ることといふ個條があつた。この贈與を諾して、千八百四十一年一月二十五日の午前八時十分五分に英軍は此處を占領して了つた。その時は長さ十一マイル、幅二マイルから五マイル、總面積三十平方マイルの小島に十平方マイルの港灣をかゝへたものだけであつたが、越えて二十年、對岸の九龍半島の割讓を受け、それから四十年ほどたつて、千八百九十八年半島の後方三百七十六平方マイルの新領土を九十九年間租借することゝなつた。

割讓當時の香港は毒蛇の徒に多い小島であつた。廣東から兵亂を避けて若干のイギリス人が逃げて來てゐたゞけであつた。昔宋の滅びた時その遺臣が九龍に逃げのび、明末に明の廷臣が香港の林中に隠れたといふから、香港九龍邊は兎角人の逃げこみ易い所と察しられる。さういふ未開無人の地を經營して今日に至らしめたのは、サー・ジョン・デビス以來歴代總督の力にもよるが、やはり其處に底力の強い、目前の計算よりも永遠の計を思ふイギリス人の力があつた。海岸を埋め立て、港をしつらへ、道路を修理し、水道を引き、あの峻峻な坂を切

り開いて住宅地を作り、千七百尺のピクトリア・ピークの直ぐ下まで鋼索鐵道を引いたのが、即ちその現はれの一部である。ピークの腹に莫大な金をかけ棧道をめぐらし、その棧道にあの堅固な鐵柵を渡したところに、イギリスの面目が見える。

### 七 植木鉢

棧道をめぐりして、又ホテルの前に戻つて、こゝから例の鋼索鐵道に乗つて山を下つた。丁度この日は日曜なので、子供づれや若い女づれで山登りに行つた者が、大きな花の枝や紅葉した樹の枝を片手にしてカーに入つて來た。十月末頃のスコットランドに行つた時のやうな心もちがする。こゝのカーはゼノアあたりのと違つて、乗客を後向きに坐らせて、坂の勾配どほりに車が傾いたまゝ急峻な坂を下るので、何だか心持が悪い。

此處を下つて支那人街へ買物にと向ふ。例によつて例の如き雜沓で、やかましいこと一通

りでない。ごみだらけの大道で何やらん食物を賣つてゐる露店が多い。同じ大道のわきに花屋があつて、大きな花輪を何十と列べてある。朝の内はもつと多いが、大抵一日の中に賣れてしまふといふ。東京で花輪が入用といふ時は、一々花屋へ注文しなければ、出来合といふのはない。それも花の少い時節には、前の日からでも注文しなければ、中々手に入らないのが常だ。その邊にも香港と東京との相違があると見えた。あちこちひやかして歩いたが、さう買つて見ようと思ふものもない。そのうち兎ある汚い植木屋の前に出た。桑のさし芽のやうなものを大きな樽の中へ何百本となく水につけてある。水に入れておけば根が出るものらし。葉はクチナシに似て小さく、枝ぶりは山茶花のやうで、もつと曲りくねつてある。これがふと目に止つて何だらうと聞くと、上村君とスリング君とで色々聞き合せて呉れて、やつと白い香のいゝ花が咲く樹だただけは分つたが、樹の名はスリング君だけに分つて、私どもには分らない。樽の中のは何年さきに花が咲くか分らぬといふので、先づ一月たつたら、必

ず花が咲くといふのを一鉢上村君が買つて呉れた。根が大丈夫かと念を押すと、植木屋は無造作に植木を土から引き抜いて根を見せた上、格別土もかぶせずに、そのまゝ無造作に鉢をしばつて渡して呉れた。この無造作に根を引き抜いて見せたところに、支那人の面目がある。これを上村君とスリング君とが大事さうに片手にもちながら、この大變な人ごみの中をわけてぶら／＼してゐるのは、如何にも支那らしい気分である。それを又隣町の縁日で、もあることか、遠く香港三界から日本くんだりまで持つて歸らうといふに至つては、いよいよ以てい／＼たる支那の大陸気分だ。

この花の名はスリング君一人心得てゐた。上村君大に憤慨して、或る植物通に就いて聞き合せたところ、その名をガルデニアといふことが知れた。ガルデニアはアメリカの植物學者ガルデンの名から出たもので、茜科に屬するものであることも知れた。これを船に持ちこんで船室にかざつておいたら、又物識がゐる、結局クチナシの一種と知れた。たゞ面白いの

は、さし芽を水の中につけておきさへすれば根がつくので、水さへやれば土も何もいらぬのだといふ。道理で買った鉢の中には砂利ばかりで土は入つてない。たゞ水をさぶく入れである。根を引きぬいて見せたいはれも、それで分つた。

この植木一鉢では後でひどい目にあつた。全體香港から植木鉢をかゝへて歸るものも間違だらうが、横濱へ着いた時税關で一切の荷物の検査は無事にすんだが、この一鉢だけは特に植物検査が必要だといふ。あいにくその検査官がゐないので、永い間待つてゐたが、歸つて来ない。とう／＼待ちあぐんで、わざ／＼人を頼んで検査官の宅まで持たせてやつて、やつと検査をすませた。それほどにして持ち歸つた樹が、歸來、日本の稀有の寒氣にちゝかんで一向振はず、今にも枯れさうになつてゐる。

この夜は木下郵船支店長の家に客となり、太洋丸樂洋丸の船員と共に廣東料理の御馳走になつた後、こゝに泊つた。

### 八 澳門

翌朝は未明に起きた。ベランダに出て見ると、港内の大小船舶にきら／＼と電燈が光つてどんよりと曇つた空に美しい。寒からず暑からぬ朝風に吹かれながら、子供とこの見飽かぬ景色を眺めてゐるうちに、だん／＼と夜が明けはなれて行く。今日は澳門へ行くはずなので郵船から案内役につけて呉れた田瀬得男君が朝早く来て呉れた。七時に此處を出て、例のい／＼たるチニアに乗つて山を下つた。澳門行の船の出る波止場に入らうとするところは、身動きもならぬ雑沓である。その中で、支那人の乗客を見ると、巡査が一々身體検査を行ふ。海賊が武器を隠して乗客に化けて来る恐があるからである。幸にわれらは何の検査もされずに無事に汽船瑞安號の客となつた。小さな船だが、船室も喫煙室も型の如くあつて、心もちのい／＼船である。上甲板の喫煙室から舳にかけて甲板を鐵の扉で仕切つて、勾欄には嚴重な

鐵網を張つてある。この鐵門の中は乗客を入れずに、五六人の衛兵の姿だけが見える。今にも海賊の襲つて來さうな物々しさである。現に近い頃も海賊に襲はれた英國船があつて、船内で大亂闘が行はれた。日本でこそ、海賊といふと珍しいが、この邊では海賊が今も盛に現はれる。香港の歴史を見ると、相當殘虐な物語が香港近海を色どつてゐる。

船は八時に鎖を解いた。八時を期して同時に廣東その他へ向けて香港を出る船が多いのでそれが相次いで出て行く様如何にも景氣がよい。わが乗つた船も負けずに早く出ればよい、といふやうな一種の競争心が起つて來る。

香港へ入つた時とは反對の方向へ、船が出て行く。西であらう。港を出てから後は、大小の島々の間を且くぐり且くぐりぬけて行くので、刻々に變化する山海の景色が少からず旅人の心を慰める。人のよさうな大兵の船の事務長が分りにくい英語で、時々話しかけに來る。ポルトガルと印度の合の子のやうな男だ。子供は寫眞を取つたり、田瀬君と甲板を歩いたり

してゐる。少し風が寒い。

そのうち海が次第に濁つて來て、いつしか全くの泥海になつてしまつた。廣東河から流る泥だ。澳門はその河口の東岸に立つてゐる。香港を距ること約四十マイル、船で三時間半かゝる。澳門は色々の點から見興を引く。先づ「澳門」と書いて「マカオ」とよむのは支那音の「アウムン」とは似ても似つかぬ。物識の説明では、土人がこの邊を阿媽港と言つたので、それが「マカオ」に轉じたのだとある。尙もつと物識の説明では、その阿媽港の音が日本の貿易商人天川屋の屋號の起源だともある。それはどうでもいゝとして、この澳門は支那中で一番古く外國貿易の爲に開かれた港で、早くからヨーロッパ人に知られた。初はポルトガルの船乗が貨物の濡れたのを干す爲といふ口實で、此處の一角を占領したが、それが公然と支那政府に承認されたのが千五百五十七年、それから千八百八十七年に清朝政府から改めて葡領と確認された。千五百年代にスペインのフィリップ二世がポルトガルを併合したと

き、一時ヨーロッパからポルトガルなる獨立國は消えてなくなつたが、その間六十年間世界中たゞこの澳門のみに、ポルトガルの國旗が翻つてゐたとの話がある。

千五百年代といへば、スペインが天下に覇を稱して、ポルトガルの航海業者が到る處にその勇名を走せた時代である。その頃のイギリスはスペインの無敵艦隊を撃攘して、やつと世界にイギリスあるを知らしめた位で、今日さしも世界第一の強國づらをしてゐるアメリカは發見されてからまだ百年もたつて居なかつた。世は斯くの如くかはり行くと、わが澳門は四百年の歴史を語る。かくて澳門は一時東西兩洋の貨物の集散地として殷賑を極めたが、香港が英國に割讓されて自由港となるに及んで、澳門の繁榮は次第に香港に持つて行かれた。それでも今人口二萬、輸出年額一億圓を出入してゐる。

泥海の中を航すること一時間近くにして、遙か彼方の小高い丘陵に、支那とも見えぬ白壁の家々の立ち列んだのが見えて來た。近づくに隨つて、船はひた／＼とその丘陵を右舷に見

て奥に入る。入つて右に一まはりすれば、大小無數のジャンクが海の面も見えぬまでにぎつたり詰つて、その奥に賑やかな波止場が見える。左舷に島が一つあつて、それで港の形を作つてある。香港とは逆だ。前に通過した丘陵の下が外港で、こゝは内港である。瑞安號は海賊にも襲はれず、海路無事澳門の港に着いた。時に十一時半。

田瀬君から無線電信をかけておいたので、郵船の澳門の世話をしてゐるメローといふ大きなポルトガルの人が迎へに來て、上陸するとそのまゝ三人を自動車に乗せて、澳門の國內を案内して呉れた。支那町のごた／＼した中をつきぬけて、だら／＼坂を登り行く。大學がある。丁度男女のポルトガル學生が勢よく出て來るところであつた。私の子供もこんな氣候のいゝ澳門の大學へでも留學させて見たらばと、ふと思つた。

立ち列んだ家々に、何處となく中世の南歐の面影があつて、道路の敷石までが中世臭い。ドンキホーテのやうな奴がどこからか劔を佩いて出て來さうに思はれてならない。忽ち一望

くわつと開けた競馬場に出る。如何さま四百年間の經營だけあつて、この邊の街路樹は何といふ樹か知らぬが、百年二百年を経たらしい幹の太いものばかり、見る目はるかに列つて立つ。此處からしばらく行くと、葡領の國境といふのへ出た。澳門は長崎の島原か、紀州の潮の岬のやうに、細いく地峽を隔て、海の中へつき出である。バスコ・ダ・ガマの一行中の者が、濡れた貨物を干すにはいゝ所と見定めたのも無理はない。國境はこの地境の中頃にあつて一列に街燈が立つてゐた。

風はあるが、寒いほどでもなかつた。車を東海岸の方へ驅ると、潮の香めでたい風が車に吹き入る。海が泥色でなくて青すんでゐたら、どんなによからうと思つた。この海岸は目下さかんに埋立築港の大作を行つてゐる。澳門の港は上流から押し流し來る土砂の爲に年々埋つて仕方がない。港灣修築工事はこれが爲に起つた。これがポルトガルなればこそ、四百年間最初に割讓されたきり尺寸の土地も擴げてはゐないが、他國であつたら、さうは行かな

かつたらうと、メロー君が愛國者らしく語る。香港が對岸の九龍を併せ、その上更に九龍半島の背面に廣大な新領土を租借したのにあてつけるやうにも聞えた。全くポルトガルなればこそ、その領土擴張は平和な埋立によつて行はれた。この埋立工事はオランダの會社が請け負つてゐるさうだが、オランダは昔ポルトガルがこの澳門を占領したのを羨んで、これを略取しようとして、二度まで澳門に攻め入つたことがある。幸にして兩度ともポルトガルの爲に撃退された。

海岸を一まはりして山手の住宅地をまはると、家々の具合が、ますく南歐じみる。煉瓦の塀に薔薇を這はせたところ、門を入つて細いだら／＼坂を取り入れたところ、青々した木立の間に小さな城寨のやうな家のほの見ゆるところ、如何にもゼノアの山手に似てゐる。ロメオが潜びこんで露臺のジュリエットと物語をするには都合のよささうな家々が、到るところにある。

山手をめぐつて後、前に出たと反対の方面から海岸に下ると、魚屋が軒を列べて、そこらぢう魚だらけ。魚臭いなんどは言ふにや及ぶ。澳門の産物は、阿片と爆竹とこの魚類とで聞えた。今一つ澳門の名物がある。そこへ車をのりつけた。公許賭博場である。モナコのモンテ・カローのカジノとは比較にもならぬ粗末な家だが、それでも澳門が東洋のモナコと呼ばれるほど、この賭博場は名高い。いふまでもなくポルトガル政廳にとつて、この賭博場は莫大な財源となつてゐる。入ると直ぐ二階に通された。この二階は丁度汽船の食堂の二階の社交室のやうに、中央を切り開いて、下なる賭博が目の下に見えるやうにしてある。下には長い卓子の端に博奕場の親方とも見えぬやさしい若い男が陣取つて、「四い子」の勘定をする。この卓子を取り圍んで金のほしさうな男が幾重にも立つて金を賭ける。われらの坐つた二階からも小さな籠をつるしてかけてゐる者がある。「四い子」のことだから、モナコのレットやトランプ・エ・カラントの込み入つたのとは違つて、一か二か三か四かにかけるだけだ。親方が

ぢやら／＼と穴のあいた丸い金を一つかみ卓子の上へ持ち出して置く。一同はそれ／＼に金を賭ける。太した金額を賭ける者もゐない。銅貨が多かつた。一同が賭けてしまふと、親方が細い棒で右の丸い金を四個づつ取つて行く。四個づつ取つて取り切るか、一か二か三かが残る。それで勝負はすんでしまふ。たはいのないものである。簡單だから短時間に幾度でもくりかへす。客がさし代り入り代り出入する。賭場でわれらをいゝ鴨と見たか、西瓜の種やら菓子やら茶を出してもてなす。やゝしばらく見た上で、賭けもやらずに此處を出た。

一時間ほどで澳門全國を見て了つて、船に歸つたのは一時であつた。後で聞くと、こゝにはポルトガル曠世の詩人カモエンスが立て籠つてその不朽の大作「ルシヤッド」を書いたといふ洞窟がある。又千五百年代にジュシュイット派の僧侶が、丁度その頃長崎で迫害をうけて逃げて來た日本の信徒の大工と協力して建てたといふ寺院の廢墟がある。いづれも見落して残念なことをした。

波止場でメロー氏と別れて、二時に瑞安號出發、香港へ着いたのは六時であつた。香港へ来た上は見えておかねばならぬといふので、又電車に乗つてウェスト・ポイントに出かけた。ウェスト・ポイントはその名の如く香港の町の西の端にある歡樂境で、五層六層の大きな青樓が軒を列べて、電燈の光まばゆく、絃歌の聲どこからともなく湧いて、町には粧を凝した歌妓が往来する。廣東の騒で昨今はさびれてゐるが、平生はえらい賑ひだと、説明して呉れた。

この夜ホンコン・ホテルに泊る。

○

十一日はいつになく朝寝をして、食事がすむと、文と二人でぶら／＼と支那店へ買物に出る。香港も今日を限と思へば、何となく名残が惜しい。しかし世に香港を知つてゐるといふ人も、大抵ヨーロッパゆきの途中に一晚とまる位のもので、われらが兎に角足かけ三日香港に

居たのは、まだ長い方だといくらか慰めもつく。

船の出るのは十一時なので、いくらぶら／＼しても時間が餘る。又バンドへ戻つて、裁判所の側の廣場へ出る。植樹の様子や英國歴代の王后の像の立つてゐるところは、テムスのエムバンクメントのやうな風情があつてなつかしい。

やつと時間になつたので、郵船のランチで本船の太平洋丸に送られる。船長を始め船員給仕までがお歸りなさいとあいさつするので、さながら家が歸つたやうな氣がする。こゝで長く世話になつた郵船の木下支店長上村副長などと、盡きやらぬ名残を惜んで別れた。

十一時に太平洋丸は香港の港を離れた。

船室は元の通り、給仕も元のまゝだ。兎も角もA甲板に出て見ると、ばつたりとハワイのブナード翁に出あつた。汎太平洋婦人會議の用件で昨日廣東から着いて、これから上海に行くのだと、相かはらず元氣がいゝ。午餐の時刻になつて食堂に行く。乗客が彼此三十人ばかり



り香港から乗りこんで来た。日本人も二人ある。支那の若い元氣のいゝのが十餘人ある。大分船は賑やかになつて来た。これらの若い支那人が時々ピンポンに子供を誘ひに来るので、いよ／＼船らしくなる。

晝すぎA甲板で豫ての望どほり退屈してゐるところへ、船長が來合せたので、船長と機關長とに案内されて、船の機關室を見てまはる。石炭が重油になつた爲不用になつた石炭艙の邊からすつと下つて、推進機の直ぐ前まで見て行く。如何にもソリツドとはこんなものかと思えるあの大きなシャフトが、これでも折れることがあると聞いて、變な思がした。

見てまはつて船長室でお茶をよばれた。やゝしばらく世間話に時を移してから、文を促して輪なけをやる。

そのうち暮色蒼茫、いつしか船内は電燈の夜となつた。晚餐をすませてから、夜ふくるまで喫煙室で麻雀をやる。波が高くなつて船のゆれる毎に、重ねた牌がずる／＼と滑りおちた。

十二日は朝湯に入つて朝食をした。めたきり、何もしない。晝餐をすませた後又何もしない。退屈の福音を解せざる文は支那人を相手にピンポンをやつてゐる。お茶の時になつて、船長から使が來て、船長室でお汁粉の御馳走になる。そこへ事務長が來り加つて、とりとめもない世間話に時をつぶす。晚餐となる。晚餐がすんで後おきてても用のない身と、八時頃臥床に入る。子供は船内で催した活動寫眞を見に行つたきり、いつ歸つて寝たか知らない。

### 九 デッキ・ゴルフ

十三日は少し寒い、天氣がよいので、甲板が珍しく賑ふ。誘はれてデッキゴルフをやる。秩父宮様はゴルフを老人のすることだと仰せられたさうだが、如何にもゴルフは老人にふさはしい。それだけこの遊は作法がやかましくて、如何にものんびりとした紳士的なところがある。ゴルフには他人の玉をはねのけようの、打ち散らさうのといふことは更でない。相手

が後れて来ると、後れた方に譲つて、先の者だけが進んで行かうとはしない。ところが、デッキゴルフとなると、名はゴルフだが、殘虐極まるもので、出来るだけ相手の玉を蹴散らし、はね飛ばして、ホールに近づけまいとする。自分だけホールに入ればよいところを、わざわざ遠く出て来て人の玉をへこますことばかり考へる。これほど意地の悪い、人の邪魔ばかりする遊戯はあんまりあるまい。仕舞には相手の顔が憎々しく見えて来た。自分は生來勝負嫌ひであるが、その中でも、このデッキゴルフが一番不快なものとしてある。

このゴルフを午前中にやつて負けて、午後又やつて負けた。しかも敵方に文が加はつてゐるから尙負ける。年寄じみたことをいふが、敵の中にわが子がゐると、どうにも子供の玉をはね飛ばす氣になれない。子供が味方の爲にバンカーのやうな所へほうりこまれて出かねてゐると、助けに行つてやりたいやうな氣になる。それから見ると、昔の武士は父子敵味方に分れて命のやりとりをしてゐるが、よくあんな事がやれたものだ、わが身に思ひ比べて感

心した。

ゴルフを二度やつたきりで、一日全く何もしない。夜は早く臥床に着いた。

この夜船は潮の都合で上海に入れず、吳淞沖に假泊した。十日の月が雲の中から見えて、泥に濁つた海面を照してゐるのが、船室の窓から見える。吳淞の町の火の光がきら／＼してゐる。

## 十 上海の泥

上海に着く一日ほど前から、海の色がうすく濁つて来る。進むに随つて、名にし負ふ黃海の黄色となり、長江の入口に至つて、全くの泥水になつてしまふ。何千年何萬年の間、上流から泥を流して、よくも泥の元がきれないと、来る毎に感心するところである。併しこの泥が集つて固つて、吳淞が出來、上海が出來た。長江の口から十三四マイルの上にある上海も

大昔には、その名の示すが如く、海のほとりに在つたに相違ない。それから更に浜つては、海のたゞ中にあつたかも知れない。

そんな古い事をいふにも及ばぬ。上海の英國領事館の前にある今の公園も、岸近くに築てられてゐた二本マストの帆船が水い間こゝにかゝつてゐる間に、次第に泥を被つて、いつしか小さな洲になつたのである。これは新に租界の外に出来た洲だから、當然支那帝國の所領に屬すべきものだ、時の道臺が争つたと傳へられてゐる。それが、結局公園のない上海に公園としておいたらよからうといふ談になつて、これを租界の工部局の手に渡したのは、遠くもあらぬ、長髮賊の亂が平いで後間もない一千八百六十八年の事であつた。

上海が興つたのも泥の爲だが、やがて泥の爲に上海が衰へ行くのではあるまいかと心配してゐるものは、杞人ばかりでない。長江の泥を吐く勢は、年々二平方マイルの泥土をこの邊に押し出して来る。最近十年の間に吳淞口外の沙洲が七尺も高くなり、この五十年間に黃浦

江の河幅が原形の三分之一を泥にとられた。若しこの勢で行つたら、今の上海の西の方の丘陵が緑樹の間にほの見ゆるやうに、黒山群島や舟山列島が緑樹鬱蒼たる大平原の上には見ゆる丘陵となつてしまふかも知れぬと、モンタルト・ツ・ジースの「上海史」に書いてある。さうなつたら、さしも貿易の繁盛を以て聞えた上海も遠く水から離れて、船から何時間か汽車に乗らなければ行けなくなる。それは大變だといふので、目下折角河川保存工事なるものを急いでゐるが、これが果してどれほどの効果のあるものか分らぬ。租界の人間の力が能く時日に頓着しない大自然の力に抗し得るかどうかは、大なる疑問である。今日上海に住んでゐる人々の生きてゐる間に、恐らく上海は船から上れなくなるだらうと言つた人さへもある。これから考へると、上海の前途ほど心細いものはない。支那が租界を取り戻すのどうのといふが如きは、餘りとしても問題が小さい。上海の憂は、租界でも工部局でも會審衙門でもない。上海を威壓するものは日本でもイギリスでもなくて、上流から流れ下る泥だ。

若しそれ上海の前途を悲觀し來れば、問題は泥ばかりでない。何分黄浦江といふ河に面して出來た細長い町のことゝて、港としてはどこまでも細長く發達するより外に道がない。現に上海の町が次第々々に細長く上流に押し出して行つて、城内から南市方面が開けて來た。これが際限なく上流へくと開けて行くと、船着場が長い間に互つて、これを相手に商賣する者は一通りの不便でない。

ロンドンのテムズの下流のやうに、兩岸を開いてドックでも澤山に作れば格別、さうでない限り、上海の港としての發達は、もう程なく行きつまつてしまふ。ニューヨークのスカイスクレーパーが無限に高い家になり得ないのは、餘り高くなると、一階が全部昇降機ばかりになつてしまふといふので、結局昇降機の問題でスカイスクレーパーの高さは自然に制限せらるることになる。上海の發達も、結局は港の長さで制限せられて、發達は其處に止まるのではないかと察しられる。

### 十一 上海城内

十四日は朝七時に吳淞を出た。黄浦江を洩ること十三四マイルにして、いよ／＼上海に入港したのは八時半であつた。數知れぬ大小船舶の間を、しづ／＼と太洋丸のやうな大きな船に乗つて入つて行くのは、晴れがましい心地がする。港内のあらゆる船舶が目ひき袖引き、見よ／＼大きな船が來たぞと取沙汰してゐるやうに見える。

上海に着くと、郵船の齋藤支店長が社員の石原清十君を案内につけてくれた。殷賑なブロードウエーから市中の目貫の場處を見てまはつた後、郊外に自動車を走らせて競馬場へ出た。立派な大道が通つてゐるので、これが支那の道路だらうかと聞くと、この邊は道路租界として道路だけが租借地になつてゐるのだといふ。兩側に點々として列んだ百姓家も支那らしくて如何にもピクチュアレスクである。ところ／＼に村の豪家とおほしきが、土塀をめぐらした中

に、幾棟か、三國史などの畫になるやうに、そりを打たせた屋根が列んで見える。

郵船會社へ歸つて齋藤支店長を煩はして、ゴルフのクラブを買ひに行く。それからホテル・マジエスチックで午餐の御馳走になつて、今度は永安公司へ買物に行く。永安公司是當地切つての大雜貨店で、これに抗するものを先施公司といふ。この兩公司是南京でも廣東でも何處でも、必ず向ひ合せに立つてゐるさうだが、この上海でもやはり兩店は向ひ合せになつてゐる。こゝで車をすてゝ織物屋の太綸に行つた後、又ブロードウエーの店をぶら／＼とひやかして歩く。時間が晩くなつては面倒だといふので、齋藤君と別れて城内に向ふ。フランス租界を過ぎて、城内に入らうとするところに物々しい鐵條網を張つて、衛兵が立番をしてゐる。國軍が何時來襲せぬとも限らぬので、孫傳芳が戒嚴令を布いてゐるのだといふ。城内に入れば、狭苦しい通がわかかへるやうな人ごみで、兩側の店には、買手が、賣手が、いづれも一杯の人ばかりである。總じて支那の店には人が多い。一人でもやつて行けさうな小さな店に

八人も九人も店の者がゐる。それが時分となると、店のまん中に飯を持ち出して、さも旨さうに、それこそ傍若無人に大勢で食ふ。

かういふひとごみを分けて湖心亭へ出る。湖心亭の名を聞いた時は、もつと閑靜なおちついた處かと思つたが、來て見ると、淺草公園の中の池の大きなやうなので、池の中に高樓があつて茶を出してゐる。この高樓へは八ッ橋のもつと直角的な石橋がかゝつて、その上には、んやりと立つて、小鳥を指先に留まらせて賣つてゐる男が、二人も三人もある。頗るいろいろたるものである。

狭い町の中を人力車が無遠慮に通る。子供が大勢人をわけて、きや、きや、と走せちがふ。乞食が何やらわめいてゐる、兵隊が心得たやうな顔をして立つてゐる。それらがいづれも甲高い聲で何やら分らぬことを喋りかはず。さう／＼しいなどの段でない。

此處を出て、兎ある茶館に入る。二階に上るが早いか、忽ち怪しげな女が人の袖を引ッぱ

り、肩につかまり、おッ取り圍んでかへすまいとする。父も子もあッけに取られる。これに僻易してはうくの體で逃げ出す。こゝから車をフランス租界に驅つて、フランスらしい町の名や店の名を見ながら走つた時は、さすがに心のおちつくを覺えた。

この夜太平洋丸の船員と共に支店長の家に招かれて、四川料理を饗せられ、麻雀に夜をふかして、船に歸つたのは十二時過であつた。今朝から變に暖かつた空は、いつしか雨となる。

## 十二 ホテル

僅かな時間で僅かな距離を旅するだけだが、その間に出来るだけ、子供に外國の趣を知らせたいのが私の望であつた。この望の爲に私は出来るだけいろくのホテルに泊つた。

長崎では光永寺の和尚が是非に宅へといふのを斷つて、ジャパン・ホテルに泊つた。小さなホテルだが、何とやらフランスめかしい、心もちのいゝホテルであつた。雲仙から夕風の冷

たいところを通つて此處へおちついたら、寢室の暖爐に、珍しやあかくと石炭の火がもえてゐる。早速手を洗つて食堂へ下りて見ると、こゝにも大きな暖爐に石炭がくわつくと燃えてゐる。外に客もないと見えて、がらんとした廣い明るい食堂の中で、この火を横にして親子は夕餐を共にした。

香港では島の裏側のリバルス灣の小高い處に灣と同じ名のホテルがあるのに入つて、コクテールをすゝつた。香港の町を出はなれてから、海のほとりの支那人の小さな家より外に人家を見なかつた目に、突然この美しいホテルが左ながら足元から浮き上つたやうに現はれた時は、何だか龍宮へでも連れて來られたやうな氣がした。ホテルは結構の美を極めたといふほどでないが、廣い地所へのびくと立てゝ、平家ではあるが、だら／＼上りの坂へ立つて二層樓にも三層樓にも見える。十數武の石段を上つたところに一面藤だなのやうなものをしつらへて、それが一杯に桃色の花とも實ともつかぬ花をつけてゐる。見るからに境域閑淨、

月夜に此處から水を眺めたなら、さぞよからうと思つた。自分には、香港島内でこのリバルス灣ホテルが一番氣に入つた。

ピークでは、ピーク・ホテルの如何にも古風なイギリス風なところでお茶にした。千八百四十一年に建てたといつても通りさうな頑丈な薄暗い間取で、こゝでも大きなイギリス風の暖爐に石炭の火が陽氣にもえて、その前で、香の高い紅茶をすゝつた。但しこの茶は漢口からしかつた。ホテルを出ようとして廊下の窓に丈夫な鐵の金物がついてゐるのを、上村君が指さして、これこそこの地でなければ見られぬタイフーン・バーをはめる所だと教へて呉れた。香港は大風の名所で、ひどいのが吹くと、今にも家がくづれるかと思ふばかりに震動する。さういふ時はガラス戸をしつかり固める爲に、タイフーン・バーと唱へる太い鐵のかんぬきを窓毎にはめる。今見たのはそのかんぬきをはめる金物だ。如何さまそれでこのホテルの建物の一通りならず頑丈に出來たいはれも讀めた。

その夜は郵船の木下支店長の宅で泊めてもらつたが、翌日はこれも強ひての勤を辭してホンコン・ホテルに泊つた。一先部屋におちついてから、ルーフでダンスを見ながら、文と久しぶり親子水入らずで食事をした。日本人の一人も見えぬホテルに客となつて、不自由な英語を使ひながら一夜を送るのが、初めてわれらに外國へ來たらしい思をさせた。

上海では潮の加減で泊ることが出來なかつた。一夜吳淞に假泊して、翌朝上海に入り、その夜船に歸つて、翌朝早く上海を出た。潮時が悪いと、上海で潮を待ち、上海を出は出ても又吳淞で潮を待たなければならぬことがある。これを二潮に乗るといふ。われらは幸にして一潮で出られた。この潮時の面倒臭さに大抵の大洋通ひの船は吳淞きりで、その奥へは入らない。

泊れぬから、せめて面影だけでもと、郵船の齋藤支店長がクラブにしようといふ午餐をホテル・マジエスチックにして貰つた。何が富豪の私宅を、その死後ホテルに作り直したものと

いふが、思ひ切つて大きな家に住んだものだと思はれる。こゝで食事中「上海毎日」の寫眞班の人が来て、丁寧に齋藤君の紹介を経て、食事がすんだら寫眞を取らせて呉れといふ。その入念の態度が少からず私の氣に入つた。日本やアメリカであつたら、食事中もかまはず、紹介も待たず、いきなりぱちぱちとやつて行つたことだらうと思ふ。食事がすんで庭へ出ると、根氣よく今まで待つてゐた記者が、坊ちゃんも御一所に願つてこいといふ編輯の命令でしたといふので、又文を呼びにやる。子供は子供で自分が寫眞を取らうとて、そこらをかまはつてゐたのを、ヤツと連れて來た。私の寫眞は珍しくないから、私が子供を連れてゐるといふところに、寫眞のニュース・バリーを認めたものらしい。私には、ついたした試験妨害のつもりであつたのが、私の子供づれで行つたことは存外諸方で興味を引かれた。歸つて後もしばしばいゝ事をしたとほめられた。私の腹の中を知らずに。

長崎から神戸へ着いたのは夜であつたが、荷役の都合で翌晩も碇泊するといふので、今度

は一夜の宿を寶塚のタカラヅカ・ホテルに求めた。いつ來て見ても、此のホテルは閑靜で家族的で、スエスの山の中のツミリ・ホテルへでも泊つたやうな氣がする。ホンコン・ホテルのだけ広いバーラではおぼろ／＼してゐた子供も、此處ではいつまでも玉突など見てゐて、寢室に歸らうとしなかつた。それほど親みのあつたものと見える。

兎に角この短い旅にホテルを六つまはつた。この六つのそれ／＼に異つた趣に依つて、おのづから異つたとつく／＼にふりを見せ得た。

### 十三 税關の検査

上海を出ると、香港から乗り合せた乗客は大部分下りてしまつた。太洋丸より少し後れて長崎丸が出るので、それに乗り移つた人もあるらしい。太洋丸の方は船も大きいし設備もいいが、長崎丸に乗る人が多くて、太洋丸に來る人はなかつた。



それは長崎丸の速力が早い點も客を引く。長崎に着いて岩壁へ横つけになる點も客を引く。尙それよりも人を引くのは、税關の役員が乗り込んで、船内で荷物の検査を行ふことである。そも／＼税關の検査に當つて、初から課税か無税かいづれかは、つきりと定つてゐるものなら論はないが、解釋の仕方一つでいづれとも定まるものは、たゞ税關吏の手心一つによるの外はない。税關吏がつむぢをまけるか、機嫌が悪いか、馬鹿に几帳面な人かで、一たび有税品と決定したら、もうそれきりだ。われ／＼のいつもいまくしく思ふのは、外國人なら、寫眞機械でも、タイプライターでも、ゴルフのクラブでも、旅行用携帯品として無税で通しておきながら、日本人には兎角さうさせないことがよくあることだ。理窟ではいかなることなのだから、一番困る。後で訴願の道はあるかも知れぬが、一々そんな面倒な手續は取つて居られぬから、そのまゝ泣寝入になつてしまふ。だから外國の旅から歸る者の目に、税關吏はとけ／＼した角でも生えて居る人のやうに見えて、なつかしい、柔かい、親しげなところ

ろが見つかからない。袖の下が利かないだけに、日本の税關吏は世界中で一番始末が悪いところ。ほす外人がしば／＼ある。袖の下が利かないのは結構なことだが、今少し當りさばりの柔い調子で物が運ばないものだらうか、誰彼かまはず脱税を取り押へるやうな見幕で臨まない譯に行かないものだらうか。と、税關吏に對する希望は誰しも同じである。税關に對する感じ一つで初めてその國に對する感じが定まる。税關吏の振舞が癪にさはつた爲に、その國に入つて後萬事が癪にさはる。玄關番が氣に食はぬと、まだ見もせぬ主人までが氣に食はぬ者のやうに推し量らるゝのと同じだ。この點に就いては日本の税關もよほど心して來た。私が横濱の税關で食事に行つた検査員を待つてゐると、『そこはお寒いから中へはひつてお暖かい』と言つてくれた。こんな事は決して今まで見られぬところであつた。

さういふ何となく恐ろしいやうな税關の役員が自分と同じ船に乗つて、折ふし顔を見合せる仲になつてゐて、船内で荷物の検査をして呉れるとなれば、初對面のどんな顔つきの人が

分らぬ税關吏に調べられるより心持のいゝことは言ふ迄もない。長崎丸に走る乗客の多いのも自然である。

#### 十四 長江の口

朝飯をたべてゐるうち、もう吳淞沖に來た。急いで、A甲板にかけ上ると、太洋丸はしづしづと泥海を分けて黃浦江から楊子江に入らうとしてゐるところであつた。少し風があつて浪が高い。吳淞を左に見て行手はすつと遙に渺々たる泥海がつゞいて、どうしてもこれが河とは思はれぬ。河を下るに随つてます／＼河が廣くなつて、ます／＼波が高くなる。いよいよ長江を出離れるといふ所に至つては、どちらが海でどちらが河だか、分らなくなつてしまふ。たゞこゝで水先案内が下船するので初めてそれと知れた。水先案内がこの荒海にどうして下船するかと、乗客が皆舷側に首をのべて見てゐる。大兵肥滿の水先案内は甲板からつる

した繩梯子をすく／＼と傳つて、下なるランチに移る。ランチが波にゆられて木の葉のやうに上下する。幾度か本船と離れたり合したり、ゆら／＼とゆらついでゐる間に、時分はよしとひらり乗り移つた。大勢が見てゐると見て、彼は愛想よく手を舉げて一同に挨拶した。ランチが本船を離るゝのを見てゐたアメリカの年配の女が私の顔を見て、『私は世界に代へてもパイロットなんていやだ』と笑つた。私は一回の水先案内料八百餘圓だと説明したら『八百圓？八百圓？それなら考へ直して見る値打がある』と又笑つた。

こゝまで來るうちに太洋丸はイタリー船ロモロ號を乗り越した。太洋丸より少し前に出帆したアメリカ船プレシデント・グラントもやがて追ひ越しさうになる。そこへ後ればせに上海を出た長崎丸は、右舷の方遙に今にも太洋丸を追ひ抜かうとしてゐる。この大きな船が幾隻も河の中で抜きつ抜かれつさるゝといふは、さすがに長江の河口である。

やがて午餐に下る。船長の語るところでは、青島方面大風雪、上海は昨日と違つて大變な

寒さだといふ。そのうち船がゆれ出したので、夕餐もそこ／＼にわれらは寢床ゆきどに入った。

○

十六日、午後三時半長崎に着、五時半長崎を出る。夜、響灘あたりで船大にゆれる。  
十七日、來島水道を通るといふので、船橋に上つて見る。あのせまい瀬戸を通る時、海水が盛り上つたやうになつて、さしも二萬トンの太洋丸さへぐうと横に傾く。夕神戸着。  
十八日、神戸出帆。夜遠洲灘で船大にゆれ、卓上のコップひっくりかへつてわれる。  
二十日、午前十一時横濱着。六日以来十五日間の生を托したる太洋丸とこゝで別れる。

—昭和二年四月「中央公論」—

その他

定價一圓二十錢

昭和四年三月十五日印刷

昭和四年三月二十日發行

不許複製

著者 杉村 廣太郎

發行人 刀澤 館正雄

印刷人 左 手 蘭

印刷所

日東印刷株式會社

發行所

東京朝日新聞社  
大阪朝日新聞社



終